

二月二十一日湯島吟行句会

洋館のゆるき坂道路の臺

みすず

鈴生りの合格絵馬や梅匂ふ

彦明

明神の春風切るか通宝錢

誠二

竜天に四配の守る廟に入る

俊彦

元勳も歩みし館春うらら

忠夫

春望や青丹夢に鳩一羽

美憲

帰るさに梅の香ほのと女坂

正一

孔子像に寄り添ふ楷や春日さす

芳博

梅の香の絵馬の重みをいやしをり

博司

春浅し孔子の見遣るニコライ堂

利忠

怨霊はいまや鎮守よ春あらし

徹夫

三月四日句会

少年の声のワプラノ雛祭

みすず

雛祭豆腐屋の笛辻を行く

彦明

雪洞に頬染めおはす内裏雛

誠二

肩寄せて近江の雛の細身かな

俊彦

朝練の子ら追いかけて春一番

忠夫

薔薇の芽や深紅に咲きし真央の舞

美憲

梅の香に誘はれ入りし茶店かな

正一

三男児育てし妻や雛飾る

芳博

行く人の軽き会釈や水温む

博司

陽光は翳し見るなり磯菜摘む

利忠

薔薇の芽の深紅に重き雨滴

勝之

啓塾や農地に新の売地札

徹矢

四月一日句会

夜桜のかなた篝火八坂かな

みすず

花の昼ひかりまぶしき遊歩かな

彦明

武運尽きし大谷陣址桜かな

誠二

気まぐれの風に初蝶乗り切れず

俊彦

咲く桜一足先に散るさくら

忠夫

春嵐嗚呼大银杏倒れけり

美憲

嬉しくてやがて不安や新入生

正一

寝そべりて釣果は問はず春の海

芳博

たらの茅の枝ごと枝ごとの息吹かな

博司

佳きことの予兆や漲る春の海

利忠

学童の声甲高く花海棠

勝之

母の顔見ず真つ直ぐに入学す

徹矢